

秋葉原通り魔事件の真相②

遠 藤 均

星槎道都大学研究紀要

経営学部

創刊号

2020年

秋葉原通り魔事件の真相②

遠藤 均

【序 ①】

秋葉原通り魔事件（無差別殺傷事件）は、日本国中に一大センセーションを巻き起こした。事件の悲惨さもさることながら、犯人の動機があまりに不可解であり、さまざまな憶測や論争をまき起こしたからでもある。

私も、大きな衝撃を受けた。その理由のひとつに、私にとって秋葉原は、学生時代、クラシック音楽のお宝を掘りだし、理想的音響機器を求め試聴を重ねた「夢の国」だったことがある。

そこで私は、各種新聞記事を集め、特集された週刊誌を買いこみ、本も多数購入した。そして、これらの資料をもとに、事件に対する私自身の見解を形づくっていったのである。

ところが、なんということだろう。加藤自身の著作により、事件を解明するための原典が、あらかたまがい物であることが明らかとなったのである。

私にとって、第二弾の衝撃だった。これまでの研究の成果や土台が、ガラガラ音を立てて崩れ去ったのだから。

そのとき思った。

「この事件について語ってきた手前、振出しにもどって研究を一からやり直す責任がある」と。

そこで私は、5年前に研究を再開することになる。

ところが情ないことに、竜頭蛇尾も蛇尾。とつぜん蜥蜴の尻尾に変わって切れた。何か月も集中し、真剣にとり組んできたにもかかわらず。

いったい、どうした、自分!?

なにを隠そう、神経がレッドゾーンに突入してしまったのである。

というのは、真相究明のため、加藤の心理を迫体験しようとした。

が、加藤の過去も現在も八方ふさがり。どこにも救いが見いだせない。そのため、深入りすればするほど、陰々滅々たる深淵に飲みこまれてしまったのである。

「朝起きて、じつは自分が加藤だったらどうしよう」

こんな馬鹿げた妄想に悩まされたことさえあった。

——翌年もあえなくノックアウトをくらう。

二度あることは……

三度目の正直!!

一昨年やっと半分まで書くことができた。

そして、昨年から今年にかけて、なんとかかんとか仕上げることができたのである。

とはいえ、まだまだ基礎工事を終えたにすぎない。

いずれは、この上に家を建てるつもりである。痛ましい悲劇がくり返されぬよう。そして、よりよい世界を築くために。

【序 ②】 ※再録

秋葉原通り魔事件（秋葉原無差別殺傷事件）は、2008年（平成20年）6月8日、東京の秋葉原で起きた。痛ましいことに、7人が死亡し、10人が負傷している。

この事件については、おびただしい報道がなされ、幾多の有識者も、その動機などについて、様々な分析を加えてきた。

だが、犯人の加藤智大（事件当時25歳）は、「捜査機関から発表される情報の大半は事実では」⁽⁰¹⁾なく、しかも、彼が知る限りでは、「事件の真相を見通すことができている有識者はひとりもい」⁽⁰¹⁾ない、とまで断言する。

彼の言葉に耳を傾けてみよう。

「捜査機関から発表される情報の大半は事実ではありません。代表的なものは『調べに対し、××と供述している』とか『捜査で××だということがわかった』などとされるものです。報道各社は、たとえそれが嘘であろうが、そのように発表されたものをただ右から左に流しているだけなのです。そうして捜査機関が創り出した架空の事件が全てのベースになってしまっているために、『有識者』は、実在しない幻の犯人の心理を一生懸命になって解き明かそうとするはめになっているのです」⁽⁰¹⁾

加藤によれば、精神鑑定も信憑性に欠けるといふ。

「建前上、捜査機関とは独立して中立的な立場で精神鑑定を行っていると言っていますが、実態は、精神科医の肩書きで捜査側が創作した事件のストーリーにお墨付

きを与える作業が精神鑑定というものです。

…供述調書とはデタラメなもの。…精神鑑定は、その供述調書を元にして行われます。実際、鑑定書の中身のほとんどが、…供述調書の丸写しです。鑑定医は、私ではなく、捜査側が創作した動機・経緯・犯人像の分析をするだけです。

確かに面接も行われはしましたが、結局は取調べと同じことです。私が話してもいないことが話したことかのように鑑定書に書かれました。『供述調書にはこう書いてある。本人も面接でこう話している。だから供述調書は信用できる』というのが鑑定書の趣旨であり、私の精神鑑定というより私の供述調書を『鑑定』しているようなものです⁽⁰²⁾

捜査機関も精神鑑定も歪められたものであるとすれば、それらを基にする裁判も、歪んだものにならざるをえないだろう。

加藤は確言する。

「捜査機関は事件の真相、事件の全容を解明するための組織ではありません。精神鑑定も捜査機関が歪めた事件を正当化する作業にすぎず、そんな精神鑑定書を信用できるものとして証拠に採用した裁判でも、事件は歪んだままです⁽¹⁾

捜査機関や有識者、精神鑑定、裁判までもが事件の真相を伝えてはいないとすれば、それらをソースとして報道する報道機関も、真実を伝えることは望みがたい。

「捜査機関が捜査で得た情報は、大手メディアを使って広報されることとなります。そこから、私が話してもいないことが私の話として、また、事実ではない関係者の話が事実として、ひとり歩きしていきます。誰も裏付けを取りません。

…情報を受け取った側では、捜査機関は正義であるという思い込みと、大手メディアが伝えるのは事実だという思い込みから、創られた事件に疑問を持ちません⁽⁰²⁾

メディアが正しい情報を伝えていないとすれば、そこから情報を得ている国民も、事件を歪んだ形で理解したつもりになっていることになろう。

それでは、この事件の真相を知るにはどうすればいいのだろうか。

加藤はいう。

「本の形にするのは、唯一、何のフィルターも通さない方法です⁽⁰²⁾

しかしながら、加藤自身にとっても、初めから事件の真相がはっきり見えていたわけではない。

「そもそも私は、取調べ時から何故自分が事件を起こしたのかわかっていませんでした。…世間知らずな私は、捜査機関は事件の真相を明らかにするために捜査をしているのだと信じきっていたことと、殺人事件の動機は不満や怒り、という誤った常識を疑うことがなかったことが原因です。4年以上かけて、ようやく事件とは何なのかが見えてきました⁽⁰²⁾

こうして加藤は4年以上の歳月を費やし、事件の真相に達することになる。そして、その成果をつぎの4冊の本にまとめ、上梓した。

①『解』.	(2012.7.10)
②『解+』	(2013.4.10)
③『東拘永夜抄』	(2014.1.25)
④『殺人予防』	(2014.8.10)

これらの本は、自身の犯行やそこにいたる心理プロセスを解明したものであり、犯罪者みずからが、これほど深く分析したものはまれであろう。それゆえ、たんに「秋葉原通り魔殺人事件」の真相を知るためだけにとどまらない。多くの犯罪にいたる心理学的プロセスの研究や道徳教育、倫理学、犯罪予防にとっても、きわめて有益な資料となりうるであろう。

なお、既述のように、この事件は、第三者の歪んだフィルターを通すことによって、真実からほど遠いものになってしまった。

それゆえ本稿では、あえて、本人の言葉をできるかぎり収録しようと意を注いだ。

【序 ③】

『星槎道都大学紀要 経営学部 18号 (P.47~59)』(2019年3月)で、『秋葉原通り魔事件の真相①』を発表した。⁽⁰⁹⁾

今回の小論は、このテーマの後半にあたる。

『秋葉原通り魔事件の真相①』では、P.47~53の記述に加え、以下のことも事件を招いた主因であるとし、「A.

母親の性格と価値観（考え方）、そしてしつけ（教育）という名の虐待」まで述べた。

- A. 母親の性格と価値観（考え方）、そしてしつけ（教育）という名の虐待
- B. 母親の影響によって形成された加藤の性格と価値観（考え方）、そしてそれらがつくり出した現実
- I. 「人のせいにする考え方」⁽⁰⁶⁾
すべてか無か思考
母親との主従関係による主体性と当事者意識の喪失
- II. 「掲示板のトラブル」⁽⁰⁶⁾と「掲示板でのトラブルをトラブルにしてしまった私（※加藤）の性格」⁽⁰⁶⁾
- III. 「痛みを与えて相手の間違いを改めさせようとする私（※加藤）のもの考え方」⁽⁰⁶⁾
- IV. 「言葉ではなく、行動で示して周りにわかってもらおうという考え方」⁽⁰⁴⁾
「どうして怒っているのかを言わない性格」⁽⁰⁶⁾
- V. 「社会との接点の少なさ（孤立している時間）を全て掲示板でカバーしていた私（※加藤）の生活」⁽⁰⁶⁾
- VI. やらない理由がない（失うものがない）という状況
「『やらない理由』が極端に小さいこと」⁽⁰²⁾
- VII. 相談するという発想がなかったこと
- VIII. 想像力の不足
他人の痛みがわかりにくい
- IX. 自分が「不細工」であることをネタにしていたこと
- X. 懲役を避け、死刑の道を選択した誤り

今回は、まず、「B. 母親の影響によって形成された加藤の性格と価値観（考え方）、そしてそれらがつくり出し

た現実」のI～Xまでを検証する。

つぎに、「加藤の証言の検証」をおこない、最後に、「結語」を述べたい。

【秋葉原無差別殺傷事件 ⑧】

- B. 母親の影響によって形成された加藤の性格と価値観（考え方）
- I. 「人のせいにする考え方」⁽⁰⁶⁾
すべてか無か思考
母親との主従関係による主体性と当事者意識の喪失

加藤の認知には、「人のせいにする考え方」と、「すべてか無か思考」いう癖がある。

このことも、行く先々で、彼の人間関係や境遇に暗い影を落としていった。

加藤はいう。

「たとえ私の生活と掲示板の利用の仕方に問題があり、掲示板でトラブルがあったとしても、私のもの考え方が違っていれば事件には至りませんでした。思えば、私の性格は問題だらけであり、この人のせいにする考え方もそのひとつです」⁽⁰⁶⁾

「何故人は私が人のせいにしてると批判するのか、何故私は人が私のせいにしてると感じるのかを考えたところ、私のもの考え方に問題があることに気づきました。過失割合の問題がそうです。私には100%相手が悪いか、100%自分が悪いかの二択しかありませんでした。私のこの考え方が原因で、例えば、客観的に見て6対4ぐらいで相手が悪いトラブルであっても、私が10対0にしてしまう…ために、人のせいにしてると感じるようになっていました」⁽⁰⁶⁾

それではなぜ、加藤は、このような考えをもつにいたったのだろうか？

「母親の価値観が全ての基準です。その基準を外れると母親から怒られるわけですが、それに対して説明することは許されませんでした。一応、『なんで〇〇しないの』と怒られるのですが、『なんで〇〇しないの？』ではなく、『なんで〇〇しないの！』と、質問ではなく命令でした。『なんで〇〇しないの』と言われて説明しても『そんなことはいいから〇〇しなさい』とさらに怒られるだ

けなのですから、私は次第に何も言わなくなりました。

私のやり方も同様です。誰かが私に対して、私の価値観で間違ったことをしてくると、私は怒りました。…相手が100%悪いと考えています。相手が何を言ってきたても全く耳を貸さず、時には力づくで黙らせましたから、私は天下の嫌われ者になりましたが、そのことすら、どうして自分が悪いくせに私を悪者にするのか、と不快に思っていました。私が親に対して自分が全て悪いと考えて対応していたように、私から攻撃された相手も自分が全て悪いと考えて対応してくれるものと思っていたからです⁽⁰⁶⁾

「これは幼少の頃の親、特に母親から受けた養育の結果だということになりそうですが、このように書くと、人のせいになっている、と批判されるのでしょうか。…しかし私は、テレビやマンガ等を制限されるように、外から得られる情報を減らされ、つまり、相対的に母親から受ける影響が大きい環境におかれ、また、母親の価値観が絶対的に正しいものとされる中で育てられてきました。他に選択肢が無い私が母親のコピーになっていくのは、私の責任ではありません⁽⁰⁶⁾

しかし、加藤が帰属していたのは家庭ばかりではない。言うまでもなく、学校にも属していた。

なのに、なぜ、このような極端な考え方が少しも修正されなかったのか。

加藤は回想する。

「学生時代の教師からも、ただ頭を押さえつけ、正しい自分に従わせようとする、タイプとしては私の母親に近い人ばかりでしたから、私が何かやらかすたびにただ感情的に怒りをぶつけられるばかりであり、考えるきっかけが得られなかった⁽⁰⁶⁾

それでも、通常、社会に出れば、修正を余儀なくされるはずである。

にもかかわらず、どうしてそんな極端な考え方を維持できたのだろう？

これについて、加藤は述べている。

「社会に出て様々な価値観に触れることができるようになってもお自分の間違いに気づけなかったのは何故かと考えると、我慢することを覚えたからだと思われま。たとえ10対0で相手が悪くても、私が我慢すれば全て丸く収まることを知り、実際にもそうすることで、トラブルが表面化せず、人から嫌われなくなり、見かけ上うまくいっていたために、問題に気づけなかったのか

もしれません。また、我慢できないものは『まあいいや』と、トラブルをトラブル相手ごと自分から切り落としてきたために、やはり考える機会を作れなかった。

…もし私にこの考え方が無ければ、ハンドルネームを入力していない自分も悪いのかも、と考えることができたと思います⁽⁰⁶⁾

「私には、100%相手が悪いか、100%自分が悪いかの二択しかありませんでした」という考え方は、まさしく「認知行動療法」における「認知の歪み」のひとつ、^{ゆがみ}「全てか無か思考 (all-or-nothing thinking)」, 「黒白思考 (black-and-white thinking)」, 「二分割思考 (dichotomous thinking)」にほかならない。

「^{すべて}全てか無か思考 (黒白思考、二分割思考) とは、なにか。

^{あいまい}曖昧な状態 (灰色) に耐えられず、いつも白黒はつきりさせておかないと気がすまない。そして、

「完全か不完全か」

「全てか無か」

「^{れい}百点満点か零点か」

「善か悪か」

「良いか悪いか」

「あれかこれか」

といった極端な二者択一的思考で割り切ろうとする。

「完璧にできないならやる意味がない」といった完全主義も、これの一形態。

けれども、現実 (日常生活、社会、組織、会社、学校など) においては、完全であることも、曖昧さがなくとも、白黒で割り切れることもまれである。

だから、こういう認知をもつと、現実との^{そご}齟齬をきたし、うつ病を呼びこみやすくなってしまふ。⁽¹⁰⁾

このような^{ひず}歪んだ考え方をしている、自分をとり巻く状況や精神状態が時間の経過とともに悪化していくのは、自然な流れであるといえよう。

【秋葉原無差別殺傷事件 ⑨】

B. 母親の影響によって形成された加藤の性格と価値観 (考え方), そしてそれらがつくり出した現実

II. 「掲示板のトラブル」⁽⁰⁶⁾ と「掲示板でのトラブルをトラブルにしてしま」った私 (※加藤) の性格⁽⁰⁶⁾

幼いときから、^{こくはく}酷薄な家庭環境で育った加藤は、それ

だけ深く、温かい人間関係や愛情に飢えていたにちがいない。

けれども、リアルな世界では、手にすることは叶わなかった。

そこで加藤は、ネットの世界にそれを求めたのである。

ところが、「成すまし」や「荒らし」は、無残にも、彼の最後の砦を破壊つくしてしまう。

加藤の怒りは、すさまじかった。

彼の異常なまでの掲示板への執着（渴愛、愛着）は、「成すまし」や「荒らし」への途方もない殺人的憎悪へと姿を変えていくことになる。

「家ででの生活は、苦痛でした。母親の絶対的支配下にあり、常に緊張し、警戒していなくてはいけません」⁽⁰³⁾

「私は『母親』など求めてはいません。…私が求めているのは、誰かのために何かをする、その『誰か』なのです。母親とは限りませんし、女性とも限りません。それこそ、誰でもいいのです」⁽⁰¹⁾

「私はひとりでは生きられない人間でした。誰かのために何かをしていなくては生きていられず、…私には、誰かのために何かさせてくれる、その『誰か』が必要でした。…例えば、私は楽器を弾きたいと思っても練習する気になりません。…私は、自分のための努力をしないだけです。楽器を弾ける私を誰かが必要とするなら、私はその人のために楽器の練習を始めます（嫌いな相手は除きますが）。私はそういう人間なのです」⁽⁰¹⁾

「私には『自分』がありませんので、純粹に自分のため生きることができませんが、『誰か』のために何かさせてもらえるなら、生きられます。『誰か』から評価され続けるなら、生きていた方が得な気がします。

『自分』がない、とは、自分で自分のために何かをすることができないということです。やってみても、続きません。私には『誰か』が必要です。『誰か』のために何かをすることで、はじめて私は『自分』を手に入れることができます。

そして、おそらくは、誰にとっても『誰か』の存在が、『やらない理由』にできる源なのではないかと思えました」⁽⁰²⁾

「他の人やものではなく、自分自身も『誰か』になります。私には『自分』がないと書きましたが、全くないわけでありませんでした。嫌なことは全力で回避します。例えば、懲役は嫌、という自分のために懲役を回避したようにです。ただ、私に欠けているのは、将来の自分の

得を考えることです。将来の自分は今よりよくなっていることを楽しみにできれば、それも『やらない理由』になるでしょう」⁽⁰²⁾

「予定が多ければ多いほど、安全です。先の予定が楽しみなことでも埋まっていれば事件など起こさなはずであり、問題は、何の予定もない人です。私など、スケジュール帳を持つ必要もないほど、予定らしい予定のない人生でした」⁽⁰²⁾

「私は、誰かのために何かをし、評価をされなくては、生きていけない人です。正確には、評価をされ続けなくてはいけないということです。評価が途切れると、急に不安になります。自分がこの世に存在しているのか、という不安です。だから私は『誰か』を求めます。誰かのために何かをさせてもらえる、その『誰か』です。

評価の形は様々です。言葉であったり、金品をもらうのもそうですが、しかし、それらは一瞬で終わってしまうものです。一方、一緒にいてもらえるということは、評価をされ続けているということです。誰かと一緒にいれば、安心します。一緒にいてくれる、というのは、私にとって、自分が最高に評価されていると思えます」⁽⁰²⁾

「現実で物理的に誰かとずっと一緒にいるのは、現実的に考えて、ほぼ不可能なことです。しかし、掲示板であれば、ケータイを持ち、料金を払い、電波があれば、必要な時にはいつでも誰かと一緒にいる状態を作ることができますから、安心でした。誰かが一緒にいれば、その人から評価してもらえます。現実で誰からも評価してもらえない状態になっても、掲示板に行けば、そこに誰かがいて、評価してもらえます。いつでも、どこからでも一瞬で行けるという点も、掲示板のいいところでした」⁽⁰²⁾

「ひとりの時間ができると、掲示板へのアクセスする頻度が自然に高まりました。というより、ケータイを手離さずに、常時アクセスしてできるようになりました。

…私と一緒にいる人の頭の中には私があります。私と一緒にいる時間の長さは、そのまま、相手が私のことを考えている時間の長さになります。ですから私にとっては、一緒にいる時間の長さが長い人ほど親しく感じます。一緒にはいられない昔からの友人と、いつも一緒にいてくれる掲示板上の友人とで、優先順位が入れ替わってしまいました。

すると、生活が掲示板中心になります」⁽⁰⁶⁾

「現実の穴埋めのためにやっているはずの掲示板なの

に、いつの間にか、掲示板があればそれでいいような状態になってしまいました。現実より^{リアル}掲示板を優先させるということではありません。あくまでも現実が優先させてはいるのですが、現実の^{リアル}穴埋めを現実^{リアル}でする努力をせず、すぐに掲示板をやるようになったということです。

掲示板にはいつも誰かがいる、というのは、メリットでもあり、デメリットでもありました。掲示板の友人という特定の誰かであれ、通りすがりの誰かであれ、そこに誰かがいて、私に評価を返してくれるという点は同じです。そのように、誰かがすぐに返信してくることに慣れてしまうと、『すぐには評価されないこと』に耐えられなくなります。掲示板中毒とは、この『即レス中毒』なのだと気づきました⁽⁰²⁾

「評価を『前払い』でもらえることもあります。期待される時です⁽⁰²⁾

「実は私は、拘置所では監視カメラなしの単独室に収容されています。自殺できないようにタオルや衣類、歯ブラシやボールペンなどは使用時以外は居室の外で保管される人もいる一方、私は全て自己管理が認められています。もちろん最初からそうだったわけではありません。入所後、数年してそのように処遇が変更になったのです。はっきりしたことはわかりませんが、どうも、担当の職員が『自殺のおそれはない』と太鼓判を押してくれたためにそうなったようです。そうであるならば、私としては、その職員（心当たりがあります）のためにも、また、私を信用して処遇を変更した拘置所のためにも、自殺するわけにはいきません。根拠もなく自殺を疑われてカメラ付きの部屋に戻されたり『保護』されたりしたならお望み通りに自殺してやろうかという気にもなるでしょうが、そのようなことは今のところされておらず、私は自殺しないことを期待されています。誰かのために何かをできるというのは幸せなことですが、拘留所側の期待に応えるのも、誰かのために何かをしているといえるでしょう。この点だけでも『生きている意味』があります。

また、『生きている意味』は自ら作るものです⁽⁰¹⁾

【秋葉原無差別殺傷事件 ⑩】

B. 母親の影響によって形成された加藤の性格と価値観(考え方)、そしてそれらが作り出した現実
Ⅲ. 「痛みを与えて相手の間違いを改めさせようとする私（※加藤）のもの考え方⁽⁰⁶⁾

加藤は、みずからの人生をふり返ってこう語っている。

「私は、不満を持った相手の心身を痛めつけることで『しつけ』をし、不満な言動を修正させようとしたことは数多くありました。ちょっとした暴言・暴力から自殺や殺人といった『命がけ』のものまで、様々です^(585/P.212)

かくのごとく、加藤の人生は、他人に対する「しつけ」の連続であり、そのたびごとに、彼の生活は、どんどん袋小路^{ふくろこうじ}に追いつめられていった。

その事例を、時系列に沿って、^{れっきよ}列挙したい。

① 加藤は、中学のとき、交際していた女子にしつけをしている。

「私は中学生の頃、交際していた女子に対して『しつけ』をしました。『浮気』をしたからです。いわゆる浮気ではありません。私のいう『浮気』とは、私以外の人、物に意識を向けることです。私と一緒にいる時に私から意識を逸らせば、『浮気』なのです。それに対して私は、彼女の顔をわし掴みにすることで『しつけ』をしました⁽⁰³⁾

② 加藤は、母親に対しても「しつけ」をおこなっている。

彼は、工業高校が私立の自動車科に行きたかったが、「大学に入ったら車を買ってあげるから⁽⁰³⁾」という母親の殺し文句に釣られ、青森県内で一番の進学校に進学した。

その後、母親の意向である北大ではなく、工業大学を目ざすと言ったところ、あからさまに嫌な顔をされた。そのさい、加藤が、工業大学でも大学に入ったら車を買ってくれるのかと確認したところ、母親はこう言い放つ。

「そんな約束、してない！」⁽⁰³⁾

この言葉を受け、加藤は、こう思った。

「『そんな大学なら車は買ってやれない』というのであれば一定の理解はできます。しかし、あろうことか母親は、約束自体をなかったことにしました。

これは、明らかに母親が間違っています。

…約束をなかったことにするという間違っただけを母に対して正しいのは私であり、正しい私は間違っている母親を『しつけ』しなくてはなりません

せん。

そこで私は、大学進学そのものを拒否することで母親の悲願である『大学生の息子の親になる』という夢を潰し、『しつけ』をしたのです⁽⁰³⁾

けっか、整備士になる気もないにもかかわらず、『自動車ディーラー』に整備士として就職するための短期大学に、「ただ遊びに行くことにした」のだった。⁽⁰³⁾

ところで、加藤は自動車に強い興味をいだいていたにもかかわらず、2004年の春まで免許証を取得しなかったのはなぜだろう？

それも、「母親が『大学に行ったら車を買う』という約束を反故にしたことへのアピール」⁽⁰⁴⁾であった。

③短大入学後、今度は父親に「しつけ」をおこなう。整備士の資格を取るための学校で、整備士の資格を取らないことによって。

「短大卒業直前、私は学校から20万円の奨学金を貰いました。それは、父親の銀行口座に振り込まれました。しかし、父親はそれを私に渡しません。遊興費にでもしたのでしょうか。私はその間違ったことに対し、整備士の資格を取るための学校を資格を取らずに卒業してやりました。数百万円をドブに捨てた痛みで父親を改心させようとしたものです。ところが父親は、『どういふつもりだんず!! (訳: どういふつもりなのか)』と、自分がしたことを棚上げして逆ギレしてきました。

(どういふつもりって、そっちこそどういふつもりだよ)

そう思っても、口には出しません。言うだけ無駄です。話にならず、私はもう父親とは二度と関わりたくないと思いました⁽⁰³⁾

④2003年7月、短大を卒業した加藤は、人材派遣事業などを幅広く手掛ける仙台の会社で準社員として働き始める。が、2005年2月末、会社を「しつけ」するために退職してしまう。

いったい、どんなトラブルがあったのだろうか。

「人件費がかかりすぎる、という理由で時給から固定給にされて残業代が支払われなくなったこと、指示されて進めていた作業をひっくり返されたこと等、ある上司とのトラブルが原因だったといえます。ただし、ただ嫌になって辞めたという単純な話ではありません。

まず私は、その上司のさらに上司に退職願を提出することで意志表示を試みましたが、それが通じなかったため、事務所に放火したうえで消火栓からホースを引いてきて放水し、少し痛い目にあってもらうことで間違った考え方を改めさせることが思い浮かびました。しかし、それは思いとどまっています⁽⁰⁶⁾

『自分がいなくなったら、会社が少し困った状況になり、そうなったら(所長が)どうして私が辞めたか考えると思いました。私が、何か言いたかったのか伝わると思いました』(公判)⁽⁰⁴⁾

その後、友だちに10万で車を売り、逃げるように仙台を後にする。

そして、「携帯電話の番号も変えたため、青森の実家とは音信不通となった」⁽⁰⁴⁾。

⑤2005年、加藤は、派遣会社から^{あつせん}幹旋された^{あけお}埼玉県上尾市にある自動車メーカーの工場^{あつせん}で働き始める。が、またしても、ある正社員に「しつけ」をするために辞めてしまう。

「そんな仕事も、2006年4月末で失われることになりました。

…私の担当だった部品置き場の部品棚の配置が変更されることになりました。その際に、主にそこで作業する者として私が意見を述べたところ、ある正社員から『何もできないハケンにくせに。ハケンはだまって言われたことだけやってろ』と言われたことが原因で、私は仕事を辞めました。

…その正社員の間違った考え方を改めさせるため、まずは所属していた派遣会社の上司経由でクレームをつけるという方法で怒りを伝えました。

…それが無視されたため、無視できない痛みを与えようと、無断で辞めることが思い浮かんだものです。私が辞めればその正社員が私の代わりに穴を埋めることを知っていましたので、…部品も残りをゼロにして、置き場の決まっていない特殊な部品をどこに置いたのかも教えずにいきなり私が辞めれば、少しはその正社員も苦勞するはずだと考えていました。その苦勞が、痛みです。

とはいっても、その正社員を痛い目にあわせたかったわけではありません。間違った考え方を改めてほしかっただけです。痛みを与えるのはその手段です⁽⁰⁶⁾

なお、この会社での人間関係は^{きはく}希薄で、しかも、青森時代からの友人とも関係が遠ざかっていた。そのため、この頃より携帯サイトの掲示板にどっぷりはまっていってしまうことになる。

⑥ 2006年5月、加藤は別の派遣会社からの紹介で、茨城県つくば市にある住宅関連部品を製造する工場で働き始めた。ところが、約束を履行しなかった派遣会社に腹を立て、「しつけ」をするために、無断で工場を辞めてしまう。

「茨城なのは、つくばエクスプレスの存在を知ったからです。…秋葉原でネタ探しをするのに、秋葉原に直結しているつくばエクスプレスは便利でした。

…工場での仕事を始めたのはいいのですが、もともと昔からの友人と一緒にいる幸せな時間を維持するために始めた仕事のはずが、仕事をする事で友人と一緒にいられなくなるのでは本末転倒でした。…仕事をする理由を見失い、やる気も失われていきました。そこで、ふと昔からの友人を掲示板に誘うことが思い浮かびました。…しかし、私が作成した掲示板に友人は来てはくれませんでした。それは、私にとっては、一緒にいることを拒否されたということになります。そのショックは小さくはありませんでした。

孤立し、かつ自殺への思いが強くなり始めたのがこの頃でした」⁽⁰⁶⁾

「派遣会社との約束を守らせようとはしました。会社は私に、業務上必要なフォークリフトの免許を取らせてやる、と約束しておきながら、そのまま放置していました。…派遣会社の間違った考え方を改めさせるため、無断で工場を辞め、派遣会社が工場から怒られることで痛みを与えようとはしました。…その結果、仕事を失ったことで、私と社会との接点はひとつも無くなりました。孤立です」⁽⁰⁶⁾

「孤立すれば、自殺はもう目の前です。私は肉体的な死には特に感じるものではありませんが、社会的な死は恐怖でした。ですから、孤立の恐怖から逃れるために自然と自殺が思い浮かんでくるのだと思います」⁽⁰⁶⁾

「この頃の加藤は、以前にも増して掲示板にのめりこんでいた。彼にとって、掲示板はなくてはならないものになっていた。彼はこの当時の掲示板の存

在を『帰る場所』（公判）と表現している。

そんな『帰る場所』で、彼は疎外感を味わうようになる。

あるとき、掲示板の仲間に対して『本音で厳しいことを書いた』ところ、一気に関係が険悪になり、掲示板から人がいなくなってしまった。彼はひどく落ち込むとともに、管理人に迷惑をかけたと思い、掲示板にアクセスしづらくなった。

彼は孤独になった。

青森や仙台では、身近に友人がいた。ゲームやアニメの話もできた。上尾やつくばでは、身近な友人こそいなかったが、掲示板という『帰る場所』があった。

しかし、そんな掲示板の仲間が、彼を避けるようになった。掲示板行きづかなくなった。彼は孤独感を深めた。

そんなとき、彼の心によぎったことがあった。

——もう自殺したい」⁽⁰⁴⁾

⑦ 2006年8月、友人を「しつけ」るために、自殺をもくろむ。

消費者金融の返済期限日の2006年8月31日。加藤は、利用限度額一杯いっぱいまで使ったのち、自殺しようとした。

なぜ自殺しようとしたのだろうか？

既述のように、青森の友人たちをインターネット掲示板に誘ったところ、断られたのが原因だという。

「友人らには拒否されました。あり得ません。そこで私は、友人らのいる地元青森で自殺してみせることで心の痛みを与える『しつけ』を行い、友人らを改心させようとはしました」⁽⁰³⁾

換言すれば、「私と一緒にいてくれない、という彼らの間違った考え方を改めさせるために彼らに心理的痛みを与えるため」に自殺しようというのである。

そのため、友人たちには、「これからトラックで車に突っ込んで自殺する」⁽⁰⁴⁾、という内容のメールを一齐送信。母親にも電話で、「これから自殺する」⁽⁰⁴⁾と、突然つけた。

そして、青森市内のバイパスで、酒を飲んで、対向車線のトラックに正面衝突しようともくろんだのである。

ところが、^{めいてい}酔酩していたからだろう。^{えんせき}縁石にぶつけてしまい、車はびたったりと動かなくなる。加藤は、

「車でトラックにでも突っ込んで、と宣言した以上、他の方法では自殺はできない」⁽⁰⁶⁾ と思い、未遂に終わった。

⑧ 2007年1月、青森にある運送会社で、トラック運転手として働き始める。
仕事ぶりはまじめ。作業も丁寧。会社の同僚との関係も良好だったため、ほどなくして正社員に昇格した。
けれども、「何かとおかしい会社の間違った考え方を改めさせるために」⁽⁰⁶⁾ しつけをし、こども退職してしまう。

「ある時、先輩が、終わったら電話をするようにと言うので電話をしたら、その先輩はケータイの電源を切っていました。ああ、そうですか、ということで放置しておいたら、その先輩は、

『なんで電話しねんぞ。おめ、喧嘩うちゅんず!? (訳：どうして電話しないのか。お前は喧嘩を売っているのか)』

と逆ギレしてきました。意味がわかりません。

後日、私が毎日使っているトラックが泥だらけにされていました。仕事が終わったら洗車しておくことになっているので私は洗車しておいたのですが、夜間にその先輩が使ったようです。その先輩は突発的な仕事に対応する要員で、空いているトラックから好きなものを選べる立場でした。

私が担当するトラックは会社に1台しかない珍しいタイプのもので、その先輩のお気に入りです。実際、よく使われており、しかし、いつもはきちんと洗車して返すのに今回に限って汚したままなのは、明らかな嫌がらせでした。

時間がないので仕方なくそのまま使ったら、会社の配車担当者から洗車をするようにと怒られました。

(洗ったよ、俺は!)

どうせ言ったって、話を聞いてはもらえません。頭にきたので、逆に一切洗車せずに汚れた車で毎日配送をしてやることによって、会社に対して『しつけ』をしました。

ところが今度は、会社から嫌がらせのような仕事を押しつけられるようになりました。冗談ではありません。私は会社のトラック100台を全て破壊してやることで『しつけ』をしてやろうかと考えましたが、

(ま、いいか。掲示板仲間に遊びに誘われているし)

と、他にやることを優先し、仕事を辞めて青森から福岡までのドライブに出発し、運送会社でのことは全てなかったことにしました。

こうして私は『天職』も失います⁽⁰³⁾

また、当初、自宅から通勤していたが、そのことが両親の離婚を招いてしまう。

「母親同様、父親とも家族のやり直しをしようと考えていました。

ところが、5月のはじめ頃、父親と母親は離婚することになりました。『あんたも帰ってきたし、離婚することにしたから』というように言われた覚えがあります。よくわかりませんが、私が離婚の引き金を引いたようです。家族をやり直そうとしていた私は全否定され、ひとりで空回りしている虚しさを感じました。

私は、家を出るように言われました。アパートを借りる費用は全額母親が用意しました。さらに現金を50万円渡され、『これであんたに渡す金はもう無い』とも言われました。つまり、それは親子の縁を切る、ということでした⁽⁰⁶⁾

そして、このことが、加藤をますます掲示板にのめりこませていく。

「家を出されたのは、2007年7月頃だったと思います。帰る家を失った私は、代わりに掲示板に帰ることになりました。私にとって掲示板が、友人と話す居酒屋のようなものから、家族と話をする家のようなものになりました。感覚的に、『掲示板に出かける』のではなく、『掲示板に帰る』ことになったということです。

…掲示板に帰り、書き込んでも反応が無く、誰もいないことを確認してしまうと、途端に不安になってきます。…掲示板は見わたす限り誰もいない真の孤独で、孤立の恐怖が湧いてくるからです。…頭がおかしくなりそうで、わけのわからない書き込みを連発し、せっかく掲示板に人が来ても、その人は私のところには来てくれない、という悪循環になっていました⁽⁰⁶⁾

その後、ネットで知りあった「兵庫の女性」に告白し、交際を申しこむも、あえなく断られてしまう。

女性にフラれ、仕事も辞め、借金もかさみ、そして家族もバラバラになってしまった加藤は、孤独感をいっそう深め、今度こそ死のうと思いつめる。

東京の中央線で飛び込み自殺をはかろうと思立ち、2007年10月下旬、父親から車を借りて、東京へ向かう。事件の約7か月前のことである。

車を上野の駐車場に停め、総武線の秋葉原駅ホームに立ち、電車を待つ。

ところがそのとき、『『人身事故で中央線が止まっている』というアナウンスが流れた。中央線のホームに立っていると思込んでいた彼は、『これで電車がホームに入ってこないの、自殺はできない』と考え、駅を離れた。

彼は、茫然としながら上野の駐車場に戻った。

そして『車で寝ていれば死ぬるかな』と思、車の中でじっとしていた⁽⁰⁴⁾

それから約半月ほどたったあるのこと。

「気づくと、駐車場の管理人が警察官を連れてきていて、その警察官に、何をしているのかと問われました。久しぶりの人との会話に涙があふれました。ごまかすこともできずに、自殺しようとしていると、そのまま答えた。

…駐車場の管理人から、とりあえず駐車場から車を出すよう言われました。金が無い、と答えると、料金は年末まででいいから、とも言われました。その瞬間、私は生きなくてはいけなくなりました。年末までに駐車料金を返済するという約束を果たさなくてはいけないからです。金銭の問題ではなく、私を信用してくれたその駐車場の管理人のために、頭が働いたものです。私としても、その約束がある限り、孤独になっても絶対に孤立はしません。自殺のことなど、一瞬で消えて無くなりました。

2007年11月中旬のことでした。年末まで余裕がありません。そのまま駐車場を出してもらった私は、急いで仕事を探し始めました⁽⁰⁶⁾

⑨駐車料金 33,500円を払うため、その日のうちに秋葉原にある派遣会社・行って派遣登録を済ませる。

こうして、2007年11月から、静岡にある関東自動車工業の工場で働くことになったが、「しつけ」をするために、無断で帰宅し、無断で退職してしまう。事の経緯はこうである。

事件12日前の2008年5月27日の夕刻。出勤すると、上司に呼び止められた。首切りリスト（※派遣社員200人中150人が対象。サブプライム住宅ローン危機による不況が原因）に入っているというのである。

加藤は、「最後までやるつもりだったのに、信用さ

れていないというか、見くびられているような対応をされ不愉快⁽⁰⁴⁾だったという。

この頃から、掲示板は荒れに荒れ、加藤に対し、「死ねよ」と暴言を吐く者や、改行をくり返し、画面を見づらくする「荒らし」、そして加藤の「なりすまし」まで現れた。

「イライラしながら送迎バスのバス停に向かいます。仕事などにイライラしているのではありません。掲示板の成りすましが腹立たしいのです。だったら掲示板なんかやらなきゃいいと思うのですが、そうすると社会との接点を持ってない空白の時間ができてしまい、急に不安になってくるので、それはできません。…どうしても掲示板にしがみつくしかありませんでした。その意味で、やはり掲示板は命綱なのです⁽⁰³⁾

その日の朝（6月3日）、バス停に着くと、派遣の主任から、軽い調子で声をかけられた。

「加藤君は契約延長だから。続けて頑張ってるね⁽⁰³⁾、と。

彼は、解雇が撤回され、喜んだろうか。

逆に、「自分がパーツ扱いされているようで、腹立たしく思⁽⁰⁴⁾った。そして、掲示板にもこう書きこむ。

「ああ、そういえば、クビ延期だって。

別に俺が必要なんじゃない、新しい人がいないからとりあえず延期なんだって。うるせーよ粕⁽⁰⁴⁾

犯行の3日前の2008年6月5日のことだった。

午前6時頃、職場に到着し、控え室で作業着のツナギに着替えようとしたが、どこにも見当たらない。

以前にも、作業着がなくなることがあった。けれど、そのときは、「作業着がなくなったことをネタにして職場の友人や同僚の笑いを取りにい⁽⁰²⁾く余裕があった。だが、今の加藤には、「ネタにして笑いとばす余裕がな⁽⁰²⁾い。怒りと苛立ちが頂点に達した。

「缶チューハイを飲みながら、ゲームをし、掲示板で成りすましらに警告を続け、睡眠不足でイライラしながら出勤する、いつも通りの朝でした。

いつもと少し違うとすれば、出勤直前、ただ警告が無視されるのではなく、成りすましが出現し、いつも以上にイライラしていたことはあるかもしれま

せん。

送迎バスの中でもイライラし、いつもの缶コーヒーを買ってもイライラし、ロッカールームに向かってもイライラです。そこで作業着のツナギに着替えようとしたら、私のツナギがありません。昨日、共用ロッカーのハンガーにかけておいたのですから、今日はそのままそこにあるはずですよ。

(なんでねーんだよ)

心の中で舌打ちをして、他のロッカーや洗濯室、はてはゴミ箱の中まで探してみました。しかし、見つかりません。ツナギがひとりどこかに行ってしまうはずはありませんから、誰かが隠したということです。その場にたまたまいた松田さんが、

「なんだ加藤、ツナギないのか？いつもなくなるんだよなあ」

と言って、ロッカールームから出ていきました。

(いつも？)

誰かがいつもツナギを隠しているなど、許されることではありません。『ふざけんな！』と私は叫び、完全にブチ切れ、持っていた缶コーヒーを壁に投げつけてへこませ、ロッカーのツナギを全て床に引き落とししてやりました。

制御不能な怒りは、一瞬です。私は肩でぜいぜいと息をしながら、まわれ右をしました。私のツナギを隠した犯人に対して『無断帰宅事件』で反撃です。そうやって問題を起こせば、塗装工程の総力をあげて犯人探しが始まるはずでした。

ロッカールームを出たところで出勤してきた菊田さんとすれ違い、

『あれ、加藤、どうした？』

と訊かれ、私は『ちょっと忘れ物を』と、とっさに意味のわからないことを言いました。別に言い訳をしなくてはいけないシチュエーションではありません。『あ、いや、やってらんないんで帰ります』と説明になっていない説明をして、あとは菊田さんを振り切って帰りました。

しかし、工場の門を出て駅に向かって歩いているあたりではもうカッカしていたものが収まり、冷静に戻っていました。

(あーあ、またやっちゃった)

いつものパターンです。私はいつもこうやって職を失ってきました。

(ま、いいか。とりあえず、帰ろう)

歩きながら、いつも通りに掲示板にアクセスし、いつも通り、成りすましらへの警告をします。坂田さんや派遣の主任などからガンガン電話がきましたが、もう出るに連れられませんでした⁽⁰³⁾

「作業着がなくなったことをきっかけにして仕事を失い、同時に職場の友人も失うことで、掲示板の他は何もなくなり、成りすましらを謝らせることに向かい始めます。

…作業着がなくなった件は、事件とは全く関係ないにもかかわらず、重要な分岐点になっていて、『たれば』も成立します。もし作業着がなくなれば、そのまま『仕事→職場の友人→掲示板→仕事……』というローテーションが続きました。そうであれば、何も起こりません。

もちろん、作業着がなくなったから事件を起こしたわけではありません⁽⁰²⁾

「コンビニ袋をふたつ手に下げて寮に戻ると、駐車場には白いワンボックスカーがとまっています。派遣会社のロゴが入っています。そんな予感はありませんでしたが、やっぱり、会社の人が来ていました。

(怒られるの、いやだなあ。ま、いいか。とりあえず、無視して部屋に入っちゃおう)

そう思って足早に横をすり抜けようとしたら、

『ツナギ、あったよ。それだけ、伝えに来た』

と話しかけられました。あり得ない話です。犯人が慌ててこっそり戻しておいたとしか考えられません。ツナギを隠した犯人の、そのずるいやり口も腹立たしいものがありますが、派遣会社の社員のまるで私が勝手に勘違いをして帰ったかのような言い草にもカチンときた私は『じゃあ何ですか、自分が悪いって言うんすか』と言い捨てて、部屋に戻りました。

要するに私は、ツナギを隠した犯人にはめられたということです。許せません。そこで今度は、『無断退職事件』によって攻撃することにしました。今度こそ、犯人探しが始まるはずですよ。その『しつけ』により、犯人は反省することでしょう⁽⁰³⁾

「しつけ」をするために退職することは、加藤にとって、いつもと同じパターンでしかない。だが、加藤をとり巻く状況は、以前とは違うものになっていた。

車のローンの支払いは滞り、借りていたアパートも放置したまま。おまけに、景気が後退し、「歳も歳だし、使ってくれるところも減ってきた⁽⁰⁴⁾。

就職となるとさらに厳しい。お金の余裕もなかった。しかも、無断退職したことで、派遣会社が借りている部屋から出ていくことを余儀なくされる。なのに、親は離婚して帰る故郷はなく、寝泊まりできる車もない。借金取りが嗅ぎつけることを恐れ、居

場所を知らせなかった友人たちとも疎遠になっている。

もはや、どこにも逃げ場が無かった。掲示板を除いては。

それなのに、なんということだろう。最後に残った命綱を、「成りすまし」や「荒らし」が、容赦なく切り刻んでいくではないか。それは、加藤にとって、身を切られるよりも残酷な痛みだったにちがいない。

八方ふさがりの加藤の怒りや苛立ちは、最後の希望の灯を吹き消す無慈悲な「成りすまし」や「荒らし」に一極集中していく。

こうして、加藤が、彼らに向けて、自暴自棄の自爆をおこなう状況ができあがっていった。

「これまでであれば『まあいいや』と自分からトラブル源を切り落としてしまっていたのですが、今回は掲示板を捨てることはできませんでした。掲示板が自分を支えてくれたことが何度もあったために期待をしてしまっていたのかもしれませんが。掲示板でのトラブルから掲示板の友人は一掃されてしまっていて、トラブルの相手だけが残っているような状態でした。それでもトラブル相手に警告をしつつ、変わらずネタを書き続け、誰かがまた来てくれるのを待っていたようでした。

…6月5日に、私は仕事を失い、そのことで職場の友人も失いました。すると、私に残っているのは掲示板だけになります。掲示板に残っているのはトラブルだけですから、私の社会との接点は、掲示板でのトラブルだけ、ということにもなります。そこから離れると孤立することになるため、孤立の恐怖は耐えがたく、私はトラブル相手にしがみつきました。そこから事件へと向かっていくことになりました」⁽⁰⁶⁾

「いつもと少し違うのは、明日以降の予定がないことです。仕事は辞めてしまいました。ここは派遣会社が借りているマンションの部屋なので、遅くとも月曜日には出ていかないといけません。

…私の社会との接点は掲示板の成りすましらだけになってしまいました。手がかりも足場も失って、命綱1本でぶら下がっている状態です。それが全てです。もう、やるしかありません。いつかは事件を起こして成りすましらを痛い目にあわせる必要があると考えていた、その『いつかは』の時が来てしまいました」⁽⁰³⁾

「私にとって、社会との接点が失われるのは、それこそ自殺してでも逃れたいと思うほどの苦痛です。…友人ができたとしても、彼らと一緒にいられるのはある程度の時間でしかなく、それ以外の時間帯は一時的に社会との接点を失っている状態であり、不安でした。何か、そわそわするのです。それを安定させていたのがインターネット掲示板で、ある意味では命綱としてとても重要なものでした。

そんな掲示板に、私に成りすまして書き込みを行う『成りすまし』が現れました。他の掲示板利用者は私と成りすましとの区別がつかず、全てを私だと思ってしまう。

その成りすましを私だと勘違いして勝手に腹を立てて荒らし行為をする『荒らし』も現れました。

(ちょっと待て。それは俺じゃねーぞ)

そう思っても、成りすましが荒らしを挑発し、荒らしはますます怒って荒らしまくるという悪循環に、私はどうしようもありません。

(あ、そうか。成りすましを成りすましだと指摘すればいいのか)

簡単なことでした。早速、そのように掲示板に書き込みます。しかし、あろうことが荒らしは、成りすましをされるのは私が悪いとして成りすまし行為を正当化し、自らの荒らし行為、それも勘違いでの『誤爆』をも正当化しました。冗談ではありません。成りすましのおかげで掲示板の私の存在は抹殺され、荒らしのおかげで掲示板には誰もいなくなり、私の『命綱』は切れました。

もし、私に何か問題があって関係を失ったのであれば、それは私が悪いのですから、仕方ありません。しかし、今回は『失った』のではなく、『奪われた』のです。もちろん、成りすましと荒らしに、です。それが許せませんでした。『しつけ』をしなくては いけません。このことにより、楽しく雑談をすることで社会との接点を得ていた掲示板を失い、その代わり、不正を行った成りすましらと対決することで社会の接点を得る掲示板が始まったのです。それが新たな私の命綱になりました」⁽⁰³⁾

⑩そしてついに、成りすましや荒らしたちに「しつけ」をするために、秋葉原で無差別殺傷事件を起こしたのである。

「事件を起こし、それを成りすましらに突きつけます。ただの事件ではなく、大事件です。成りすましらが心の痛みを感じるような、身の危険を感じるような、そして誤りを認めて謝るような、そんな大

事件でなくてははいけません。

また、成りすましに事件を伝えるためには報道される必要があります。

そのためにはとにかく派手に、大々的に報道したくなるよう報道各社が食いついてくるような大事件にしなくてははいけません。計画はもう完成していました。日曜日の秋葉原の歩行者天国にレンタカーのトラックで突入し、その後ナイフで刺してまわるといふ計画です。何十回も警告を発しているうちに具体化していました。

…ただし、私は事件を起こしたいわけではありません。むしろ、起こしたくないのです。だから、警告を続けました。より攻めた、強力な警告です。しかし、相変わらず無視されていました。謝ってもらえば、事件なんか起こす必要はありません。事件を起こすのは、痛みを与えて謝らせるための手段です。しかし、それは最後の手段であり、警告だけで謝るなら、それで十分なのです」⁽⁰³⁾

「私は成りすましに心理的な痛みを与え、その痛みでもって成りすましの間違った考え方を改めさせようと思いました。

…誰でも条件反射化している行動は意外とたくさんあります。…相手の間違った考え方を改めさせるために痛みを与える必要が生じる、という条件が私に輸入された時には、もう痛みを与える方法が頭の中に浮かんできているということです。…思い浮かんでしまったら、それを実行するか思いとどまるかの二択しか、私にはありませんでした。

…各種メディアという弓で大事件という矢を放ち、成りすましという的を射たようなものです、的が手の届くところにあるなら殴るなりけとばすなり何でもできますが、はるか遠くに的があるために、飛び道具を使うしかありませんでした。

ということは『矢』は何でもいいということになります。

…他人の生命を犠牲にしない事件や他人に関わらせない事件も考えられる中で、私が思い浮かんだのは、無差別殺傷事件でした。当時、…色々考えて、その中から選択したわけではありません。一瞬で思い浮かんでしまっていました。そして、既に述べた通り、他の方法は考えませんでした」⁽⁰⁶⁾

とはいえ、加藤は、最初から本気で事件を起こそうと考えていたわけではない。

みんな掲示板から去って行ってしまったことに、耐えられなくなった彼は、「成りすまし」や「荒らし」

に警告するとともに、いちど離れてしまった仲間の注目と関心をふたたび引こうとしたのだろう。そのためには事件を起こすとほのめかすことが有効であると考えた。それはあたかも子どもが親の関心を引こうとして問題行動を起こすようなものであったろう。

しかし、こののち起こる新たな出来事や書き込みは、加藤の予想をはるかに超えて、加藤を事件に導いていくことになってしまった。

では、『人のせい』にすると同様、…きちんと考えれば問題に気づけるのに」⁽⁰⁶⁾、なぜその過ちに気づけなかったのだろうか？

「痛みを与えて改心させる考え方が、世の中のどこにでもよくあることだから」⁽⁰⁶⁾ だという。

たとえば、「宿題を忘れた生徒に往復ビンタする教師、ミスをした選手を殴るコーチ」⁽⁰⁶⁾ がいい例であり、「戦争は、その究極」⁽⁰⁶⁾ であるという。

「これらはいずれも、自分が正しいと考えているのは自分の価値観でしかありません。自分の都合、とっていいものです」⁽⁰⁶⁾

ただし、「私の場合も、考え方そのものはよくあることでも、その手段は最悪のものでした。許されるはずがありません」⁽⁰⁶⁾

「もし私にこの考え方が無ければ、成りすましをされようが何をされようが、何事も起らなかったといえます」⁽⁰⁶⁾

それでは、なぜ加藤は、こんな歪んだ考え方を身につけてしまったのか。

「何故このようなものの考え方になったのかと考えて自分の人生をさかのぼってみましたが、やはり、最初からそうだった、としか考えられませんでした。このような考え方に変ったきっかけになる出来事等は無く、こうして自己分析するまでは、この考え方は当たり前のこととして、何の疑問も持っていませんでした。

私は、遅くとも小学1年生の時にはもうこの考え方による行動を起こしていますから、これも幼少の頃に母親から受けた養育の結果だということになりそうです。…例えば、私が母親が料理をしているところにちょっかいをかける、という間違いを改めさせるために母親は私を2階から落とそうとしました。…しつけといえ、しつけなのでしょう。その意味では、私も成りすましらし

つけをした、と捉えることもできます」⁽⁰⁶⁾

なにか納得のいかないことが起こると、加藤はいつも他人に対し、正義感を振りかざし、問答無用で、度が過ぎる「しつけ」をしようとした。これは母親から受け継いだものではあるとはいえ、「人を呪わば穴二つ」。自分自身もそれによって墓穴を掘ることになる。そして、こんなことをくり返すたび、墓穴はどんどん深くなり、ついには、はい上がれないところまで深くなってしまった。

どん詰まりになった彼は、既述のように、なんとか自殺を試みる。

一度目は、2006年8月31日、友人に「しつけ」をしようとして自殺を試みた。

二度目は、2007年10月末。東京の中央線で、電車で飛びこんで自殺しようともくろむ。18歳の女性にふられ、仕事も辞め、両親の離婚により居場所がなくなったためである。

けれども、人身事故のため電車が来ず、またしても自殺は未遂に終わった。

ジョン・マルツバーガー（精神分析医）の臨床研究によれば、自殺の危険の高い精神科患者には、自殺につながる三種類の耐えがたい感情状態がみられるという。⁽¹¹⁾

- ①孤独感 (aloneness)
- ②自己軽蔑 (self-contempt)
- ③すさまじい怒り (murderous rage)

加藤は自殺を試みるたびごとに、墓穴はドロドロとなり、ついには底なし沼と化す。

しかも、ゾンビに咬まれた加藤自身も、しつけの連鎖反応によって、ゾンビに成り果てた。

こうして、にっちもさっちもいかなかったところで……。

なんということだろう。

ついに、いきり立つあまり、幾多の命と引き換えにしてまで「しつけ」をしたいと思わせる人物に出会ってしまう。

それは、自殺へのエネルギーが、ベクトルを変え、殺人へのエネルギーに変換されたとみることもできよう。

いずれにせよ、憎悪と歪んだ正義感に憑りつかれた加藤は、雪崩を打って「しつけ」や復讐へと突き進むことになる。

そして、視野狭窄におちいった彼は、その手段として、無差別殺人という最悪の方法を実行に移してしまったのである。

以上のように、加藤の歪んだものの考え方は、すべての現実を黒く染め、破滅の道へと彼自身をいざなうことになった。

ところで、この「しつけ」をしなければならないという強迫観念は、臨床心理学の認知行動療法における認知の歪みのどれに当てはまるのだろうか？

それは、主に、以下の点であると考えられる。

- ①『べき』『ねばならない』思考(“should” and “must” statements) 『命令型思考』(imperatives)』
- ②『感情的決めつけ (emotional reasoning)』

①の『べき』『ねばならない』思考とはなにか。

現在、未来において……

「～すべきだ」

「～しなければならない」

「～でなくてはならない」

とみずからルールをつくりあげ、それを頑なに信じこむ。

過去に対して……

「～すべきだった」

「～すべきではなかった」

と無理な期待をし、激しく悔やむ。

つまり、自他のあり方や行動に対し、柔軟性を欠いた(融通がきかない)おのれの基準を厳格に適用し、固定的(絶対的)理想をかたくなに求める。

けっか、自他の行動を制限したり、過度のプレッシャーや窮屈な心の縛りをかけたりして、追いつめてしまう。こうなると意に反し、想定外の望ましくない事態をまねきやすい。たとえば、自分自身においては、罪悪感や自己嫌悪、失望感、自信喪失、自縄自縛などにつながり、やる気や気力を失う恐れがある。

他人ににおいては、自分の基準どおりに行動しない相手に対し怒りやフラストレーションを感じてしまい、人間関係をくずしやすい。高ずると、対人関係を崩壊させたり、他人に対する非難や制裁(いやがらせ、お仕置き、いじめ、リンチ、懲罰、殺人事件、粛清、闘争、ホロコースト、戦争)に発展したりすることもある。⁽¹⁰⁾

加藤はいう。

「成りすまし行為は悪だと思っていましたが、よく考えると根拠がなく、成りすまし行為は悪ではありません。当然、『成りすましの正当化』も、悪くありません。それを禁止する法律がない以上、してはいけないことではないのであり、何ら問題はないことでした。むしろ、それを私の勝手なルールで謝らせようとしたことが問題で

す」⁽⁰²⁾

ちなみに、なぜ加藤は、考えを改めたのだろうか？

彼自身も、過去に同じような成りすまし行為をしたことがあることに気づいたからでもある。

「思えば、成りすましは私もしたことがあり、人のことをいえません。…出会い系サイトまがいの掲示板があり、私はそこに女性のふりをして書き込んで、本気で口説いてくるアホをからかって遊んでいたことがありました」⁽⁰²⁾

②の「感情的決めつけ」とは？

「自分はそう感じる（思う、信じる）。だから、真実（事実、正しい判断）にちがいない」

そのときの自分の感情にもとづいて現実を判断し、それを真実と思いこむ、というものである。⁽¹⁰⁾

加藤は、母親から叩きこまれたこれらの歪んだものの見方（原因）により、そのまま忠実にひずんだ言動（結果）を引き起こした、と解釈することもできよう。

【秋葉原無差別殺傷事件 ①】

B. 母親の影響によって形成された加藤の性格と価値観（考え方）、そしてそれらが作り出した現実

IV. 「言葉ではなく、行動で示して周りにわかっ
てもらおうという考え方」⁽⁰⁴⁾

「どうして怒っているのかを言わない性
格」⁽⁰⁶⁾

加藤の特徴である「言葉ではなく、行動で示して周りにわかってもらおうという考え方」。かつ、「どうして怒っているのかを言わない性格」は、すでに小学校低学年から現れていた。

「小学校低学年のときには、工作の時間のときに、文具を片付ける人を巡って争っている二人を殴り、自分で片付けたことがあった。彼は、『殴る』ということで、自分の思いを相手に伝えようとしたのだという。

このような加藤の暴力性には、担当教員も気づいていた。小学1年生から3年生までの加藤の指導要録には『すぐカッとなることが多い』と記されている」⁽⁰⁴⁾

事件直後、中学の同級生が、『FRIDAY』の取材を受け

てこう語ったという。

「アイツは中学の時からキレキャラで、周りが見えない性格だった。授業中、突然、目を吊り上げ、同級生の胸倉を掴んで喚き出したんです。後でケンカを売られた相手に『どうしたの？』と聞くと『さっぱり（理由が）わからないんだ』とキョトンとしていましたよ」⁽⁰⁴⁾

また、別の同級生も証言する。

「『加藤は静かにキレルタイプでした。とにかく地雷のスイッチがどこにあるかわからない。これは高校を卒業して社会人になってからも同じでした。彼の地雷源がどこにあるのか、最後までわからないままでした』」⁽⁰⁴⁾

弟によると、加藤は「学校でイライラすると、彼は素手でガラス窓を割り、血まみれになって家に帰ってきたこと」⁽⁰⁴⁾があったという。

このように、加藤は、昔から「言いたいことや伝えたいことをうまく表現することができず、「行動で示して周りにわかってもらおうと」⁽⁰⁴⁾していた。

加藤はいう。

「人生を振り返っていて、私にはこの口喧嘩というプロセスが無いことに気づきました。いつもいきなり無言の攻撃でしたから、それでは通じるはずありませんでした」⁽⁰⁶⁾

では、なぜ加藤は、こうなってしまったのだろうか？

「その通じるはずがないことを何故私がしていたのか」というと、それは、自分自身に対してはそれが通じていたからです。つまり、私は相手の無言の攻撃を受けると、それは自分が悪いからだと考え、その意味をおおよそ読み取り、自分の間違いを改めてきたからです」⁽⁰⁶⁾

なお、この「無言の攻撃」という刺激を受けると、すぐさま「自分が悪いからだ」という反応を示すのは、認知行動療法における認知の歪みのひとつ、「個人化」である。

「個人化」とは、なにか。

なにか望ましくないことが起こったとき、「自分のせいだ」、「私が悪い」というように、自分自身に関連づけて考えてしまう考え方のクセである。たとえ自分に責任（原因、関係）がなく、自分の力だけではどうすることも

できず、自分でコントロールできないことであったとしても。すると、その帰結として、強い罪悪感や自責の念、無力感、自己嫌悪、劣等感、屈辱感などにさいなれてしまう。⁽¹⁰⁾

加藤に染みついた「個人化」は、加藤の性格をひずませ、ゆがんだ思考を生むことになった原因のひとつであると考えられる。

では、なぜ加藤は、このような考え方を身につけてしまったのだろうか。

「私に対して誰が無言の攻撃をしていたのか」というと、主に母親です。…私が翌日着ようと用意してみた服を母親が床に投げ落とすのは、私が自分で着たい服を選んではいけないのだと理解し、服への興味を消しました。私以外の人々が攻撃される場合でも、例えば、父親がトイレを使った後に母親が便器に洗剤をかけるのは、父親がトイレを使うのがいけないのだと理解でき、食べてもいないものの料金を支払って母親が店を出たのは、注文したものを持ってくるのが遅い店が悪いのだと理解できました。

このように、私は人の無言の攻撃の意味がわかってしまう人でしたので、他の人も当然わかるものと考えていました。ですから、『通じていない』のではなく『無視されている』とばかり考えていたために、このやり方を改めることはありませんでした。また、私は意味がわからない攻撃を受けた時でも、攻撃を受けるということは自分が悪いのだろうかと思ひ、何がいけないのかはわからないままでも親に謝りました。同様に、私から攻撃を受けた人は、たとえその意味が通じていないのだとしても、少なくとも謝られるはずでしたから、『無視されている』という思いを訂正することはできませんでした⁽⁰⁶⁾

事件後に自殺した弟も、手記のなかでこう証言している。

「母も含めて私の家族全員に言えるのは、叱ったり、怒ったりするときに、その理由を説明しないことです。だから私は幼いときから、怒られた理由を自分で考えねばなりません。また、それを不可解なことだと思つたこともありませんでした。犯人(※兄の加藤智大)が過度に独善的な判断・行動をとるのは、こうしたことが影響しているのかもしれない⁽⁰⁴⁾

結果的に、加藤のこの言動パターンは、^{やまいこうこう}病膏肓^{はい}に入り、事件を引き起こす原因のひとつになった。

「成りすましや荒らしは、どうやら嫌がらせというわけではなさそうですので、もし私にこの考え方が無く、例えば『荒らしても中傷してもいいけど成りすまだけはやめろ』とか『ネタにいちいち本気で反論してくるな』等と言葉で説明していれば、状況が変わった可能性はありそうです⁽⁰⁶⁾

【秋葉原無差別殺傷事件 ⑫】

- B. 母親の影響によって形成された加藤の性格と価値観(考え方)、そしてそれらがつくり出した現実
- V. 「社会との接点の少なさ(孤立している時間)を全て掲示板でカバーしていた私(※加藤)の生活⁽⁰⁶⁾

社会との接点の少なさを、すべて掲示板によってカバーしようとしたことが、事件に結びついてしまったと、加藤は述べている。

「…掲示板そのものには問題は無いのですが、その使い方が問題でした。掲示板はあくまで社会との接点のひとつでしかなく、それで全てをフォローしようとしたのが間違いでした。掲示板から離れてしまえるチャンスも何度かありましたが、努力し苦勞して社会との接点を確保しなくてはいけない現実と違って楽だから、と掲示板に頼ってしまう様子は、依存というより中毒といった方がいいのかもしれない。

宮城の会社や青森の運送会社で危うく事件を起こしそうになっても、それらを自分から切り落としてしまうことで思いとどまってきたように、今回も掲示板を切り落としてしまえば事件は起こらなかったというのはひとつの可能性です。それができなかったのは、私が自分の中で掲示板に大きな役割をもたせてしまったことが原因だったと考えています⁽⁰⁶⁾

「私は、社会との接点がなくては生きていられません。問題が発生しては『しつけ』をしようとするも無視され、あるいは逆ギレされるので、結局、最後はその問題の人間関係そのものを自分から切り落として生きてきました。そのために、直接・間接に次々と社会との接点を失っていき、自殺を考え始めるもそれは回避すべく必死で社会との接点を見つけようとはしましたが、うまくいかず、とうとう全ての社会との接点を失った私は、完全なる孤立のなかでふらふらと自殺へと向かい始めたのでした⁽⁰³⁾

「私は、社会との接点がなくては生きていられません」と自覚しながらも、いっぽうにおいて、『しつけ』によってつぎつぎと社会との接点をぶち壊していく加藤智大。このあまりに矛盾した言動が、どんどん彼をどん詰まりの袋小路へと追いこんでいった。

【秋葉原無差別殺傷事件 ⑬】

B. 母親の影響によって形成された加藤の性格と価値観（考え方）、そしてそれらが作り出した現実

VI. 失うものがない（やらない理由がない）という状況

「『やらない理由』が極端に小さいこと」⁽⁰²⁾

加藤は、みずから社会との接点を潰^{つぶ}していったけれど、ついに「失うものがないという状況（やらない理由がないという状況）」に陥^{おちい}ってしまう。

そして、「失うものがないという状況」は、犯罪へ向かう歯止め^{けっかい}を決壊させた。

すなわち、犯罪に対するブレーキを失い、怒りのアクセルのみとなった加藤という名の車は、無差別殺傷というカタストロフィへ向かって暴走することになる。

「〈やる理由〉の効力は、その人が置かれている状況・環境・状態・事情によって差が出てきます。ですから、『普通は事件は起こさない』のに事件を起こしてしまう人については、その人にとっては〈やる理由〉が重大だったからだと考えるのは、半分は正解です。しかし、たとえどんなに強力な〈やる理由〉があろうとも、それを上回る〈やらない理由〉があるなら、その行動は『やらない』のです。〈やる理由〉があるから事件を起こすのではなく、〈やる理由〉を上回る〈やらない理由〉がないから事件を起こすのだと理解しましょう」⁽⁰¹⁾

「事件を起こした後の現在では、事件を起こした結果、多くの人に迷惑をかけることになることを理解しています。しかし、事件当時はそれをわかっていませんでした。だから事件を思いとどまることができなかったのです。

何より昔からの地元の友人たちには迷惑をかけたくはなかったのですが、事件前には、迷惑がかかるとは思ってもみませんでした。…これほど迷惑をかけることをわかっていたら、事件など起こしませんでした。

…また、工場での仲間たちにも迷惑をかけたくありませんでした。

…以上の他には、迷惑をかけたくないと考える人はい

ませんでした。

…ここで『家族は?』と思った人は、そう思える家族がいる人なのでしょう。しかし、…私には『家族』などいないのです」⁽⁰¹⁾

たいてい〈やらない理由〉の最大要因のひとつとなるのは、「家族に迷惑をかけたくない（悲しませたくない）」ということであろう。

しかし、加藤にとって、家族は〈やらない理由〉にはなりえなかった。それどころか、「私には『家族』などいないのです」⁽⁰¹⁾とまで言い切るのである。

「多くの人は親に迷惑をかけないようにしようと思うらしいのですが、私も普通に育てられたなら、そのように考え、事件は起こさなかったでしょう」⁽⁰²⁾

「そもそも何が間違いなのかといえば、『普通は事件を起こさない』と考えることが間違いなのです。…誰でもいつでも事件を起こす可能性があります。可能性はあるけれども、事件は起こしていないのです。…『普通は事件は起こさない』と傍観していないで、誰もがリスクを抱えているということを認識したうえで、『普通は事件は思いとどまれるのにどうして思いとどまらなかったのか』と考えましょう。

『普通は事件は起こさない』と言われますが、それは本当は『普通は××だから事件は起こさない』というように、事件を起こさない何らかの事情が想定されているはずで、事件を起こさないのが当たり前、なのではありません。何らかの理由があるから思いとどまっているだけなのです。思いとどまるための何らかの理由があるのが『普通』だとはいえるでしょう。『普通』でなくなる、つまり、思いとどまるための何らかの理由を失えば、事件という手段が使われてしまいます」⁽⁰¹⁾

「なぜ事件を起こしたのかという疑問には、最初から答えが出ているのです。〈やる理由〉があり、かつ〈やる理由〉を上回る〈やらない理由〉がないから、事件を起こすことになります。それだけのことです」⁽⁰¹⁾

ただし、「何が〈やらない理由〉になるのかは、人によります。本人が置かれている社会環境に加えて、過去の経験・学習によって形成された性格・価値観がそれを決定づけます。人生は人それぞれなのですから、〈やらない理由〉も人それぞれなのです。それなのに、自分自身の〈やらない理由〉を想定し、他の人の行動について自分の〈やらない理由〉と照らし合わせて『普通はやらない』と考えていませんか?それでは疑問が生じるのは当

然です。価値観は人によって異なるのであり、ある人の行動について考えるなら、その人の価値観で考えなくてははいけません。その人の行動は、その人の価値観で決定されるからです⁽⁰¹⁾

『やらない理由』が勝てば、とりあえずは事件は起きません。殺人だろうと自殺だろうと、『やらない理由』があることが、最後の最後に踏みとどまる、命綱になるはずです⁽⁰²⁾

「社会全体としては、現在は、『やる理由』は何なのかを探り、それをつぶそうとしているようです。しかし、私は、それよりも、『やらない理由』を確保させる方が効果があると思います。ある『やる理由』をつぶしても、別の『やる理由』が発生したら、結局、同じことです。一方、『やらない理由』があれば、どのような『やる理由』にも対抗できます。『やる理由』があっても、『やらない理由』があれば、やりません⁽⁰²⁾

「事件は、全ての人を持っている選択肢のひとつです。しかし、同じ問題を抱えていたとしても、事件を起こす人とそうでない人がいます。その違いはどこにあるのでしょうか。極論すれば、〈やらない理由〉の有無、ただその一点のみが違うのです。〈やらない理由〉があれば、思いとどまります。私は秋葉原無差別殺傷事件より前にも、殺人だの放火だの器物損壊だのといった犯罪行為や自殺を何度も考えました。『攻撃的』だからではなく、『利他的』だからでもなく、もちろん、うつ病その他の精神的な異常があるからでもなく、いずれも、抱えた問題をどうにかできる現実的な手段として思い浮かんだものです。しかし、全て思いとどまってきました。なぜなら、その時には〈やらない理由〉があったからです。捜査機関も報道各社も『有識者』も、私が過去に何度も事件を考えてきたことを私の『凶暴性』や『人間性の異常』を強調することにしか使いませんが、本当に注目すべきなのは、たとえ考えたとしてもそれらを思いとどまってきたという事実でしょう。〈やらない理由〉があれば、思いとどまるのです⁽⁰¹⁾

加藤は以上のことを母親の事例で説明している。

「実は、〈やる理由〉はあまり重要ではありません。たとえ〈やる理由〉があっても、〈やらない理由〉がそれを上回るなら行動は思いとどまるからです。もし最初から玄関に客がいたなら、母親は私にチラシで『食事』をさせることはなかったでしょう。『虐待を知られていないがチラシで食事をさせれば虐待を知られる』という変

化が生じる状況だからです。実際、母親は、虐待を第三者に知られそうなピンチになってはじめてチラシで『食事』をさせることをやめました⁽⁰¹⁾

【秋葉原無差別殺傷事件 ⑭】

B. 母親の影響によって形成された加藤の性格と価値観（考え方）、そしてそれらが作り出した現実

VII. 相談するという発想がなかったこと。

加藤には相談相手がいなかった。

いや、それどころの話ではない。

相談するという発想すらなかった、というのである。

「もともと相談をするという発想が私にはありませんでした。…相談をしようと思ってでもできないのではなく、相談をしようと思うこと自体が無いのだということです。家の中では誰かが誰かに相談するということはありませんでしたし、…嫌われ者の私は人から相談されることもありませんでした。知らないことはできません。

…相談をするということが身につかなかった理由は、ふたつ考えられます。

まず、母親との関係です。私は失敗が許されない環境で育てられました。おねしょをすることや、テストが100点でない等のわかりやすい失敗もそうですが、他の人ができることが私にできないことも失敗、他の人が知っていることを私が知らないことも失敗、そうした失敗を指摘される（からかわれる）ことも失敗とされました。そこから、人に相談をすること、つまり、自力でどうにかできないことも失敗なのだとすると、相談することができないことを説明できます。もちろん、母親とは物理的に離れていますから怒られることはないのはわかっていますが、その影におびえるのは、十数年かけて固まった防衛本能なのかもしれません。

…もうひとつは、…指示待ち人間ではいけない、と学校で教わったことが考えられます。私はそれを、『思いついたらどンドンやれ』と解釈してしまっていました。何かする時、相談するのは指示待ち人間だ、という誤解です。そのため、社会に出てからも、使えない奴、と思われなくなかったために、私は相談をするということがありませんでした。

もし私が人に相談していたなら、事件は回避された可能性があります。『掲示板で成りすましをされ、それを正当化されて、その怒りが抑えられない』と誰かに相談したなら、私などには思いつきもできないような解決方

法が示されたかもしれません」⁽⁰⁶⁾

【秋葉原無差別殺傷事件 ⑮】

- B. 母親の影響によって形成された加藤の性格と価値観（考え方）、そしてそれらが作り出した現実
- VIII. 想像力の不足
他人の痛みがわかりにくい

加藤が事件にいたった原因のひとつとして、想像力の不足があげられよう。

想像力が足りなければ、おのずと他人の痛みに対し、鈍感になる。

そして、「他人の痛みがわかりにくい」ほど、加害行為に抵抗が薄れ、犯罪のハードルもそれだけ低くなっていく。

「想像力が足りない、と言われます。確かに、『他人』のことは考えもしませんから、想像力が足りないといえましょう」⁽⁰²⁾

「小学校低学年の頃、クラスでぬり絵が流行しました。しかし、自分もやりたくても、学校の『お勉強』以外のものは悪だとする母親には、当然、ぬり絵帳など買ってはもらえません。そこで私は、クラスメイトのぬり絵帳からページを破り取って、自分のものにしてしまいました。また、色鉛筆も折って、半分自分のものにしてしまいました。クラスメイトには泣かれ、教師には怒られたのですが、当時は何がいけないのかわかっていませんでした」⁽⁰²⁾

「私は、昔は、周りの人のことなど全く考えない人でした。その後、少しずつ周りのことも考えるようになってきたものの、それでも一般的なレベルには届いていない、というのが正解でしょう」⁽⁰²⁾

「『他人の痛みがわかりにくい』という指摘に限っては、私に当てはまるかもしれません。とはいえ、…自己愛が強いからではなく、物心ついた頃から何もかもを否定され続け、もはや何も感じなくなるまで母親に鍛えられたおかげで『戦車のハート』を持っている私は、ちょっとやそっとのことではダメージを受けないために他人の痛みがわからないのだと気がつきました。それこそ、ハケン切りを屁とも思わない私にはハケン生活の不安やハケン切りのショックなどといった『普通』の人たちの気持

ちがまるで理解できないように、です」⁽⁰¹⁾

「ある時、私は、事故で母親を亡くしたクラスの女子に『母親が死んだくらいでめそめそしやがって』と言いました。クラスは静まりかえり、その女子は泣きだし、私は別室で『反省』させられたのですが、意味がわかりませんでした。

…担任は、『相手の立場になって』と言うくせに、母親が死んでも悲しくない私の立場になって考えようともしてませんでした。おかげ様で、私はそういうキレイゴトが大嫌いです」⁽⁰³⁾

「私は、実家で母親に『殺された』のです。『芸術や文化の深さに触れる』ことで『自分を大事にするという気持を他人と共有し合うこと、人間としての深さ、他人に対処する姿勢』を養うとされているところ、私の母親は私に周りから『芸術や文化』を排除しました。全ては学校での評価、試験の成績のためです。テストの点数につながらないものは『悪』とする、…大学受験のためのエリート校のような状態でした。私の母親は、私がクラシック音楽のCDを購入したものに対して、『なんでそんなものに金を使うの！』と怒鳴りつけてくるような人間だったのです」⁽⁰¹⁾

【秋葉原無差別殺傷事件 ⑯】

- B. 母親の影響によって形成された加藤の性格と価値観（考え方）、そしてそれらが作り出した現実
- IX. 自分が「不細工」であることをネタにしていたこと

加藤は推理する。

なぜ、「成りすまし」や「荒らし」が執拗に攻撃を加えてきたのだろう？

「不細工」をネタにしていたことが原因なのではないか、と。

すなわち、「不細工」をネタにしたことで、「不細工」であることに本気で悩んでいたであろう「成りすまし」や「荒らし」の劣等感をひどく刺激してしまったのではないかと。そして、このことが、彼らをして執拗な攻撃に走らせたのではないかと。

「私は『不細工』をネタにしてみました。珍しいものではありませんし、あくまでネタなのですが、私のように自分が不細工であるという現実を受け入れた人はと

もかく、そうでない不細工な人にとっては、自分が攻撃されていると感じることになるのではないか、ということに気づきました。おそらく荒らしは、自分が不細工であることに本気で悩んでいたのだと思われます。それをおもちゃにされたら怒るのは当然で、私に問題がありました」⁽⁰⁶⁾

【秋葉原無差別殺傷事件 ⑰】

B. 母親の影響によって形成された加藤の性格と価値観（考え方）、そしてそれらがつくり出した現実
X. 懲役を避け、死刑の道を選択した誤り

加藤は、犯行におよぶ直前、最後の最後のところで思いとどまった。

ところがそのとき、とっさに、あることに気づいてしまう。「掲示板に犯行予告に見える具体的な書込みをしちゃってしまっていた」⁽⁰¹⁾ ことに。

そして思った。

「掲示板などで犯行予告に見える具体的な書込みをした人は見せしめ的に『厳罰』を喰らわされる」⁽⁰¹⁾。逮捕され、三年間も刑務所に収監されるのはどうしても耐えられない。ならば、ここで事件を起こし、一年くらい我慢して死刑になったほうがまだ、と。

この決断が最後の引き金となり、あの凄惨な秋葉原無差別殺傷事件を招来することになったのである。

「私は懲役三年の刑から逃れるために死刑判決でそれを上書きすべく、事件を起こしました」⁽⁰¹⁾

加藤は、そこにいたる経緯を克明に描いている。

「帰ろう、と私は思いました。やることが見つかったからです。レンタカーのトラックを返さなくてはいけません。そもそもそのつもりなのであり、帰りの高速道路料金も燃料代も、残してあります。

（もういい。掲示板なんか、もうやらん）

成りすましらのことも、もうどうでもよくなりました。…いや、帰るわけにはいかなかったのです。

（ちょっと待て。掲示板に何を書いたよ？）

掲示板に犯罪予告に見える具体的な書込みをすると、犯罪になります。逮捕され、刑務所にぶち込まれ、懲役を食らわされます。

（冗談じゃねーぞ）

3日くらいなら我慢してもいいですが、3年間もの懲

役は絶対に嫌でした。大体にして、前科者になってしまえば、もう生きてもいられません。懲役3年の後に明るい未来が待っているのであればともかく、ただ無駄に心身の苦痛を味わされるなど、まっぴらごめんです。

（冗談じゃねーぞ！）

掲示板に事件を宣言してからもう20分も経過しています。とっくに警察に通報されていて、既に個人は特定されており、いつ捕まってもおかしくありません。とにかく、今すぐにどうにかしなくてはいけない緊急事態です。

（ああ、そうか。事件を起こせばいいのか）

私はトラックに乗っています。そして、ナイフを持っています。現在地は秋葉原で、歩行者天国は始まっています。つまり、全て準備済みなのです。

（何人か死ねば死刑だよな）

以前、何かのマンガで、凶悪犯は1年で死刑になると知りました。刑務所に1年もいるのも嫌でしたが、その後すぐに殺してもらえただけ、懲役3年よりはマシです。とはいえ、やっぱり人を殺傷するのも嫌です。だからさっきから3回もためらっているのです。しかし、やるしかありません。嫌でもやるしかないのです。もう時間もありません。またぐるぐると走りまわるわけにはいかないのであり、今度こそ、覚悟を決めました。尻に火がついており、私も必死です。もう後がないのです」⁽⁰³⁾

「私が何をしたのかといえば、…無差別殺人をしたのでもありません。私は、懲役を回避したのです。取調べを受けている時からずっと『殺すつもりではなかった』と話していましたが、まさにその通り、私は『殺すつもり』ではなく『懲役を逃れるつもり』だったのでした。人を殺傷するのは、そのための手段です」⁽⁰¹⁾

ところで、加藤はなぜそれほどまでに懲役を恐れたのだろうか？

「私が回避しようとしたのは、懲役三年の刑でした。誰が好き好んで刑務所に行きたがるでしょうか。三日間くらいなら社会勉強として入ってみてもいいですが、三年間は長すぎます。

補足するなら、私は、刑務所にいるのは殺人犯を筆頭にゴロツキ、チンピラ、ヤンキーばかりで何かと因縁をつけられる毎日になると思っており、また、看守は看守で収容者を暴行しているとも思っており、食事はパンと水だけといった粗食で、軍隊などとは比較にならないほど娯楽も自由もない生活なのだと思っていました。そんなところに三年間も放り込まれるくらいなら、死んだ方がマシです。

もちろん、実際にはそんなことはありません。拘置所で実際に生活してみて、自分の誤解に気がつきました。しかし、事件当時の私は誤解をしていたのであり、それはなぜかという疑問が生じるのは当然のことでしょう。

おそらくですが、マンガで読んだ『収容所』のイメージがあり、それと刑務所とが混同されてしまっていたのだと思います。また、刑務所の職員が収容者を暴行したとする報道に接した覚えがあり、そのために、全ての刑務所の職員がそのようなことをしているのだと思い込んでしまっていました。

…つまり、知識と経験の不足が問題だったということです⁽⁰¹⁾

なお、見方を変えれば、加藤が死刑を選んだのは、実質的には、三度目の自殺でもあったといえよう。

【秋葉原無差別殺傷事件 ⑩ 証言の検証】

加藤の証言はどこまで信用できるのだろうか。

たとえ偽証していないと仮定しても、必ずしも自分自身を正しく自己分析できているとはかぎらない。

また、プライドや自己防衛機制によるバイアス、死刑を望んでいるとはいいながら死刑回避のための印象操作や責任転嫁などがないかどうか検証してみる必要がある。

たとえば、事件の約7か月前の2007年10月下旬のこと。

18歳の「兵庫の女性」にふられ、仕事も辞め、両親も離婚して居どころのなくなった加藤は、東京の中央線の駅から電車で飛びこんで自殺しようともくろむ。

そして、地元青森から目的地に向かって父親から借りた白い車を走らせた。

その道すがら、掲示板で知り合った3歳の子供がいる「群馬の女性」宅に立ち寄る。3度目の訪問だった。

そのとき、なにが起きただろう？

「1カ月前と同じく、昼間はゲームセンターなどに行き、夜は部屋で酒を飲んだ。

…夜が深まり、二人は床についた。女性は目を閉じると、加藤が胸の辺りをつついてきた。彼女は気づかないふりをして、そのまま眠った。

翌日、東京に住む掲示板仲間の男性が合流した。夜になり、3人で飲んだ。

…この夜は、子供を入れて4人で床についた。

問題が起きたのは、翌朝だった。

女性が圧迫感を感じて目を覚ますと、加藤が自分のお

腹の上にまたがり、馬乗りの状態になっていた。彼は腹部に性器を押し付け、腰を振り始めた。

彼女はびっくりした。

——『のいてくれる？』

とっさに、そう言った。

加藤は無言で、首を横に振った。もう一人の男性は、まだ横で眠っていた。

彼女はもう一度、同じことを言った。今度は加藤が『イヤだ』と言った。彼女は恐怖心を抱いた。

『このままではまずい』。そう思った彼女は、静かに語りかけた。

——『重いから、とりあえずのいてから話そう』『こういうことはよくないから』

加藤は、ようやく彼女から離れた。落ち着きを取り戻した彼は、『すみません、すみません』と何度も誤った。そして、部屋を飛び出していった。

その日、加藤は戻ってこなかった。

翌30日、女性は加藤に連絡した。すると、加藤は『まだ近くにいる』と言ったため、『まだ残っていた荷物があるから、戻ってきたら』と語りかけた。

加藤は戻ってきた。

女性は、話は後にして、とりあえずシャワーを浴びるよう勧めた。加藤はそれに応じた。

シャワーを浴びているとき、部屋に置かれた加藤のカバンの中身が見えた。コンドームが入っていた。

シャワーから出てきた加藤に対して、女性は怒りを込めながら問い詰めた。

『カバンの中が見えちゃったんだけど、私とやるつもりで来たの？』

加藤は首を横に振った。そして、唐突に言った。

『死ぬつもりでこっちに来た。死ぬ前に楽しい思い出を作りたいかった』⁽⁰⁴⁾

この件に関し、加藤はつぎのように弁解している。

「群馬の友人は女性ですが、私が甘えて抱きついたものを犯そうとしたと誤解して私を責めるため、私は、誤解させた私が全て悪いと考え、冤罪を受け入れて謝り、そして関係を絶ちました」⁽⁰⁶⁾

どちらがより真実に近いかは明らかであろう。

かりに、加藤の言い分が正しいとすれば、加藤の言動パターンの常として、事細かに反論し、偽証した相手に精神的打撃を加えようとするはずである。

ところが、加藤はそうしなかった。しかも、彼にしては、表現があまりに冷淡すぎる。実際、あの事件は、加藤の執念深さを抜きにしては語れないのだから。

たほう、この女性には、偽証する動機もメリットもない。逆に、加藤の性格や事件の規模を鑑みれば、偽証するデメリットは、はかり知れないだろう。

けれども、これを根拠に、加藤の陳述がすべて信用できないと考えるとすればどうだろう？

特称肯定命題（※あるSはPである）にすぎないものを全称肯定命題（※すべてのSはPである）にまで敷衍する拡大解釈であると思量される。

それではなぜ、加藤は、他の証言の信憑性を危険にさらしてまで嘘をつく必要があるのだろうか？

この点に関して、元特捜検察官・田中森一の経験談が参考になるのではないだろうか。

『事情があったんです』

自白したあと、被疑者は口をそろえて言う。

どんな悪人でも、自分自身を正当化したいものだ。

だから自己正当化する言葉を必死で訴えてくる。そんな自己正当化は、法的には許されるものではないし、世間では通用しない。だが、本人にとっては、それが心の救いになっている。

どんな人間にもプライドがある。たとえ極悪人でも、最後に残ったプライドを無下に否定していいものではないのではないか。そう思ってきた。だから、無茶な自己正当化だとわかってはいても、その言葉を聞いてやった。逃げ道を求める相手の道までふさぐことはできなかった⁽¹²⁾

たしかに、加藤の証言をすべて信用することはできない。

だが、それ以前のマスコミ等による発表よりは、はるかに真実に近いのではないだろうか。

また、犯罪者自身が、これほど深く自己分析をおこなった記録はまれであり、犯罪心理学やプロファイリング（profiling）等にとっても大変貴重な資料であることは確かである。

それゆえ、加藤の証言を尊重しつつも、決して鵜呑みにはせず、論理の破綻や飛躍などに留意しながら総合的に判断し、読み解く必要があろう。

【秋葉原無差別殺傷事件 ⑩ 結語】

加藤の証言によって、「秋葉原無差別殺人事件は、成りすましらを心理的に攻撃する手段⁽⁶⁾であったことが、明らかとなった。

この動機は、加藤にとっては、自明のことであり、なんら不自然なものではなかったろう。

しかし、ほとんどすべての人にとって、とうてい理解

できるものではないだろう。ネズミー匹殺すために、家全体に火をつけて、多くの死傷者を出すなどといった行為は。それはあまりに狂気に満ちている。目的と手段が少しも釣り合っていないのだから。

だから、どうしても、それだけでは不気味な違和感や隔靴搔痒の感を拭いきれないのである。

そして、まさに、この点にこそ、この事件の特異性と異常性、そして核心があるにちがいない。

これまでも、「なぜ、無差別殺傷が頭に浮かび、しかも、それを単なる手段として実行できたのか」という問題について、多少なりとも言及してきた。

けれども、それだけでは十分ではないだろう。

ここでは、なぜ、縁もゆかりもない人たちを無差別に殺傷するという凶行に走るることができるのか、という点について、さらに考察を加えたい。

加藤は、母親によって存在価値が激しく否定されてきた。しかも、それが悪循環となって、他人への「しつけ」や「無言の攻撃」に波及していったといえよう。

そして、そのたびごとに、みずからの価値（人材市場価値、社会的価値、精神的価値など）が、怒涛のように飛び散っていった。

けっか、彼の潜在的にもつ高いプライド（※彼の言葉からそれがあふれだしている）を傷つけていったにちがいない。

そして、その反動により、生みだされたマイナスエネルギー（プライドの高さに反比例する劣等感など）が膨らんでいき、それが怒りや恨みとなって復讐のエネルギーを際限なく高め、他人への「しつけ」や「無言の攻撃」をこじらせていったと考えられる。

それは同時に、彼自身は自覚していないとしても、そのぶん、社会に対する漠然とした怒りや憎しみをも高めていったにちがいない。

ならば、加藤は「秋葉原無差別殺人事件は、成りすましらを心理的に攻撃する手段です⁽⁶⁾と主張しているが、それが動機のすべてではないと思われる。他にも目的をとげる方法はいくらでもあったのだから。

加藤自身は、自覚していようがまいが、それは世間に対する漠然とした復讐でもあったのではないか。そう仮定すると、殺害対象が「無差別」であったことが、少しは理解できよう。具体性をもたない漠然とした怒りや憎しみは、具体性を欠いた無差別殺人と共通性が高いのだから。

加藤はネットにこう書きこんでいる。

「望まれずに産まれて 望まれて死んで

待っている人なんか居ない 俺が死ぬのを待ってる人はたくさんいるけど

みんな俺を敵視してる 味方は一人もいない この先も現れない⁽⁰⁵⁾

全員が敵であれば、無差別に人を殺すことは、論理的に不合理ではなくなるだろう。少なくとも加藤本人にとっては。

しかしながら、「なぜ、ほとんど抵抗なく、無差別殺傷ということが頭に浮かび、しかも、それを実行できたのか」という疑問を解くためのより重要なカギは、以下の点にあるのではないだろうか。

既述のように、加藤は二度までも自殺をはかろうとした。とりわけ、最初の自殺未遂のように、自分の命を引き換えに、友人を「しつける」というのは、あまりにおのれの命を軽く扱っているといわざるをえない。

また、懲役は嫌だからという理由で死刑を選択し、しかも、とっさに無差別殺傷におよぶことができるのも、もとはといえば、自分の命を軽んじるころから発していると考えられる。

こういう軽はずみなことが軽々とできるのは、彼にとって、おのれの命の価値が軽いからである。そして、命の価値が軽いのは、自己価値観（※自分自身に対する評価）があまりに低いからであろう。

じっさい、加藤智大は、『殺人予防』のなかで、「若い犯罪者に欠けているのは、たいていの場合、規範意識ではなくて、自尊心である」⁽⁰¹⁾

と説く加藤尚武^{ひきたけ}（京都大学名誉教授）の考えに賛同している。

また、加藤智大は、きっぱり言い放つ。

「私は…自己愛などというものも持って」⁽⁰¹⁾ いない、と。

元ヤクザの作家・安倍譲二^{あべじょうじ}は、ヤクザについてこう述べている。

「ヤクザというのは、…一般社会では、人から期待されなかったり、愛されなかった人たちかもしれません。それが意識するとしないとにかかわらず、本人の肉体の底に澱^{おり}のように溜^たまっています」⁽¹³⁾

「親分が、一度、

『死んでくれ』

と言ったとき死ぬるのは、単純に忠誠心とか何とかいったものだけではないように思います。もしかしたら、自

分の生命に対してさえ横着^{おうちやく}になれる、尋常^{じんじょういちよう}一様でない精神構造から生じてくる“勇氣”なのかもしれません」⁽¹³⁾

そして、みずからの命を軽視するものは、他人の命をも軽く考えるようになるにちがいない。

加藤が、いかなる理由があるにせよ、「しつけ」の手段として無差別殺人を実行できたのは、自己価値観^{ていらく}の低落からくる「おのれの命の軽視」が根底に横たわっているからだ、私は思う。

そして、自分の命を大切にしない者は、他人の命も大切にできないという特徴がある。

たとえば、加藤は、対向車線のトラックと正面衝突することによって自殺を図ろうとした。しかも、掲示板に参加しない地元の友人たちを「しつけ」するための手段として。また、最終的には懲役を回避し、死刑を選択するためだけに、罪なき人たちを無差別に殺害してしまう。

これほど他人（運転手や通行人）の命を軽んじることができるのは、自分の命の価値の感得を通じ、他人の命の価値を感得していないからである。

では、なぜ、加藤は、みずからの命の価値を感得できていなかったのだろうか？

それは、これまで見てきたとおり、とりわけ幼少期において、親の愛情を十分受けていないからであると考えられる。

愛されるということは、愛する価値があると承認を受けられることをも意味する。

加藤が親から愛情を注がれていれば、みずからの命の価値を感得し、同時に他者の命の価値をも感得したことだろう。

いや、それどころではない。

加藤においては、幼いころより、愛されないどころか、さんざん虐待を受けてきた。

虐待を幼少期より受けつづけてしまうと、虐待に対する抵抗感が相対的に薄れ、被害者から加害者へ容易に豹変^{ひょうへん}しやすい。

だからこそ、他人を虐^{しいた}げる無差別殺人を犯すことに大した抵抗も罪の意識も感じなくなってしまうと考えられる。

また、「痛みを与えて相手の間違いを改めさせ」という暴力的手法も、虐待された体験を通しておのずと身に着けたものだろう。

さらに、虐待が日常的であったために、「想像力が不足」し、「他人の痛みがわかりにくい」人間に育ったにちがいない。

さらにまた、親から虐待されて育ったことで、「自分が『不細工』であることをネタ」にする自虐^{じぎやく}（自分への虐待）にも、違和感をいだかなくなったのではないだろう

か。

加藤は、リアルな世界で家族の愛情を受けてこなかったがゆえ、つねにおののくほどの孤独感にさいなまれ、「一人きり」となることを異常に恐れてきた。「私にとって、社会との接点が失われるのは、それこそ自殺してでも逃れたいと思うほどの苦痛です」⁽⁰³⁾と述べているほどに。

だからこそ、防衛機制を働かせ、その代償として、ネットの世界で、その匱乏を満たそうとしたのだろう。

つまり、加藤は、子どものころからずっと、親にとって自分が必要のない存在である(親から愛されていない)と思い悩んでいた。だからこそ、ついで現実世界で叶えられなかった「認めてほしい」、「愛してほしい」、「必要とされたい」といった常軌を逸するほど肥大化した承認欲求を、ネットの世界で補填しようとしていたにちがいない。

ならば、そこに込められた思い入れは、たいいていの人には想像もできないほど大きなものだったことだろう。

そればかりではない。

母親から受け継いだ歪んだ認知により、現実においてうまく立ち回れず、いつもトラブルを起こしてしまう加藤。「言葉ではなく、行動で示して周りにわかってもらおうという考え方」をもつ彼にとって…。

ネットの世界は、唯一本音で語り合える居場所であり、リアルな世界より、はるかに重要な世界であった。たとえ、バーチャルな世界ではあろうとも。

いや、加藤にとっては、それこそがリアルワールドであり渴望していた住家であった。

ところが、あろうことか、「成りすまし」や「荒らし」らは、無慈悲にも、唯一のやすらぎの場所であり、最後の砦となつたわが家に、火をつけ、焼き尽くしてしまったのである。

加えて、その悲痛な体験は、忘れていた幼少期の虐待や恨みつらみをフラッシュバックさせたことだろう。

けっか、「成りすまし」や「荒らし」に対する怒りは、母親に対する感情と渾然一体となつて暴走し、コントロールがきかないほどの怒りと憎悪を生みだしたにちが

いない。

別言すれば、たった首の皮一枚でつながった唯一の「命綱」。最後の生きる希望を奪われた加藤は、ネット上の擬似家族を皆殺しにされたような感覚を覚え、抑えきれないほどの怒りを覚えたのだろう。

そしてついに、激昂とねじれた反動は、目には目を、火には火を。お仕置きという名の復讐へと向かっていったのである。

参考(引用)文献

- (01) 加藤智大. (2014.8.10). 殺人予防. 批評社.
- (02) 加藤智大. (2013.4.10). 解+. 批評社.
- (03) 加藤智大. (2014.1.25). 東拘永夜抄. 批評社.
- (04) 中島岳志. (2013.6.30). 秋葉原事件 加藤智大の軌跡. 朝日新聞出版.
- (05) 長谷川博一. (2015.4.1). 殺人者はいかに誕生したか. 新潮社.
- (06) 加藤智大. (2012.7.10). 解. 批評社.
- (07) 片田珠美. (2016.3.1). 自己愛モンスター「認められたい」という病. ポプラ社.
- (08) ロバート・レスラー&トム・シャットマン 著/相原真理子 訳. (2000.12.31). FBI心理分析官～異常殺人者たちの素顔に迫る衝撃の手記. 早川書房.
- (09) 遠藤均. (2019.3.25). 秋葉原通り魔事件の真相 ①. 星槎道都大学. 星槎道都大学紀要 経営学部, 18: 47-59.
- (10) 遠藤均. (2019.3.25). 認知行動療法における認知の歪み. 星槎道都大学. 星槎道都大学紀要 経営学部, 18: 29-38.
- (11) John Maltzberger. (1986). Suicide Risk: The Formulation of Clinical Judgment. New York University Press.
- (12) 田中森一. (2007.6). 反転 闇社会の守護神と呼ばれて. 幻冬舎.
- (13) 安倍譲二. (1987.4.30). 極道渡世の素敵な面々. 祥伝社.

The Akihabara massacre ②

ENDO Hitoshi

Abstract

The Akihabara massacre was an incident of mass murder that happened on Sunday, 8 June 2008, in the Akihabara, Chiyoda, Tokyo, Japan.

At 12:33, a man drove into a crowd with a truck, killing three people and injuring two; he then stabbed at least 12 people using a dagger, killing four people and injuring eight.

Tokyo Metropolitan Police Department arrested Tomohiro Katō on suspicion of attempted murder. Katō was sentenced to death by the Tokyo District Court in 2011, and the sentence was upheld on appeal in 2015.

